

ちょっと読んでみませんか(令和七年正月)

第75話『令和七年 今年の言葉』 〓 本源寺住職 本間健司

昨年の正月プリントでお話したことを覚えていますか？

年末に発表される「今年の漢字」について触れ、今年(令和六年)は「希望を感じる漢字が選ばれるような一年になるといいですね」という言葉で締めました。

結果は皆さんご存知のように、【金】という漢字が選ばれましたよね。パリオリンピックでの日本人の活躍や、大リーグでの大谷翔平選手の“金星級”の大活躍がその理由でしょう。

いずれもスポーツに関する話題ですが、今年こそは政治や経済の分野でも【金】に値するような明るい話題が生まれることを祈るばかりです。

さて、そのオリンピックメダリストや大谷選手がインタビューを受けた際に共通して口にするのが「支えてくれるチームや応援してくれる皆様のおかげです」という言葉です。それも決して口先だけでなく、心の底から出ている言葉であることが伝わってきます。

きっと、自分の力を強く信じながらも、周りへの『恩』を深く認識し、その『恩』に報いたいと感じている、その「報恩」の想いは一流になるための不可欠な要素なのですよ。

日蓮聖人も、やはり深い「報恩」の想いから法華経お題目の布教に邁進されました。日蓮聖人遺文辞典の「報恩」の項には次のような説明があります。

〈恩には世間一般の倫理的道德的なものと、悟りに導く仏教的なものがある。〉

日蓮の報恩の対象は『心地観経』の四恩説を承けて、肉体を養育せる「父母」、精神を教育せる「師匠」、身心を保護せる「国主」との主師親三徳、何等かの関係において我々の身心を育て教え護る「一切衆生(しゅじょう)」とをあげ、とりわけ最も重要なものとして、仏法僧の「三宝(さんぼう)」の恩徳を説いている。

日蓮が実践した報恩の道は、宗教の立場に立ち、妙法五字の信仰をもって父母・師匠・国主・一切衆生をことごとく成仏せしめ、娑婆即寂光(しゃばそくくわう)を実現して草木国土も聖化せしめるための「身をやぶり、命を捨てる」覚悟の行動であった。〉

大聖人の「報恩」は、たとえ父母や師匠から反対されたとしても、たとえ身に危険が及ぶとしても、真実の教えをもつて人々を導くことが「真の報恩行」であるとの、深い宗教的信念に基づいたものでした。

では一方、一流アスリートでもなく宗教家でもない者たちは、「報恩」についてどのように実践していけば良いのでしょうか。

先日、講義を受講させて頂いた法華宗前総長の原井日鳳（につぼう）先生の言葉がとても印象深く残っているのです、ここで紹介したいと思います。

〈第一に人間は多種の動植物の命を取って生きており、実際は他の生物の命と共生してはいない。現実には他の命を食料としなければ人は生きられず、身口意（行動・食事・意識）に犯してしまう罪業に対しても、懺悔罪障消滅（さんげざいしょうしょうめつ）の生き方、供養回向（くようえこう）の生き方がなければ人間の価値は失われるだろう。〉

まず他の命に尽くす「菩薩行」がなければならぬし、命の原点に帰ることが必要である。食料となる動物ならずとも、毎年地球上に絶滅種が何千何万と伝えられ、人間の仕業、環境破壊によるものが多い。

先生の言うように、何でもかんでも便利に手に入ってしまう現代において、私たちは日々多くの命を犠牲にし、想像できないほど大きな「恩」を被りながら生きていることを忘れてしまいがちではないでしょうか。

まずは、この「犠牲となつたいのち」への「恩」の想いを日々心に刻みながら生活することが、誰にでもできる、いや人間として誰もが行うべき『報恩行』だと感じます。

「いただきます」「ごちそうさま」そんな当たり前の挨拶も、自分の血肉を作って頂いていることを念じ心を込めて：

更に一步進めて、みんな多くの「いのち」の多くの「恩」を受けて生きているかけがえのない命だからこそ、自分の命も周りの人の命も互いに尊重し大切にしながら生きていかなくては。そういう想いに満ちた社会になれば、無益な批判のし合いや争いも無くなることでしょう。

そんな安穩なる社会への願いも込めて、令和七年 今年の言葉は

『日々これ報恩行』

にしたいと思います。

日々の生活を『報恩』の想いで取り組むことで、あらためて「父母の恩」「社会の恩恵」等にも思いを馳せ、皆様にとって心豊かな一年になれば幸いです。

私は僧侶として、大聖人の教え「一切衆生をことごとく成仏せしめ、娑婆即寂光（この世を浄土にすること）を実現する」『報恩行』にも一歩ずつ取り組んでいく所存です。共に日々実践して参りましょう！

あらためて、皆様の身体健全家内安全を一心に祈念しながら：

合掌 南無妙法蓮華經